
遊撃士の私と〇〇〇でアーティストなお姉ちゃん

星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊撃士の私と〇〇〇でアーティストなお姉ちゃん

【Nコード】

N7785Y

【作者名】

星

【あらすじ】

なぜか、私と双子のお姉ちゃんは離れ離れになった。父がお姉ちゃんを連れて、どこかへ行ってしまったからだ。

これはとある双子の物語。

光に生きる妹と、闇に生きていた姉の物語。

零の軌跡、碧の軌跡のネタバレあります。また、原作改変の可能性

があります。

おかあさんのはなし

「ねえ、おかあさん」

「なあに、フエン」

東方人街の外れにある小さな家。そこに、少女とその母である女性が住んでいた。

パチリ、パチリと鳴る囲炉裏を囲み、夕飯を食べていると少女が無邪気な声で母に話し掛ける。

「なんで、わたしにはおとうさんがいないの？」

あまりにも無邪気な問いに母の箸が止まった。

いつかは来ると思っていた問いだったが、あまりにもそれは唐突すぎた。いや、ただ逃げていただけなのかもしれない。

もうこの子も8歳だ。

日曜学校に通い始め、外の世界にも目が行き始めた年頃だ。父がいないことを気にするのは最早時間の問題だっただろう。

母は数回、深呼吸した。決意を固め、口を開く。

「お前のお父さんはちゃんというわ。ただ、お父さんには受け継がなければいけない道があつて、次の世代にその道を渡さなければいけないの」

「せだい？ なにそれー」

「ふふふ、まだ難しかったかな。そうねえ、大事なお仕事を続けていくのに必要なのよ」

「だいじなおしごとって？」

「それは言えないけど……。でも、いつか双子のお姉ちゃんに会えたら教えてもらえるかもしれないわね。お前の片割れに、会えたら

##

お母さんの話によると、私には双子のお姉ちゃんがいるらしい。らしい、というのは私が幼い頃、お父さんが私のお姉ちゃんを連れてどこかへ行ってしまい、私は幼すぎて覚えてないからだ

私と同じ、紫紺の髪と瞳を持ったお姉ちゃん。

結局、お母さんは私にお父さんの仕事を教えてくれなかった。お姉ちゃんが継ぐであろう、仕事。

私は、知りたくて知りたくてたまらなかった。

だから、死に物狂いで特訓し、遊撃士になった。カルバードで推薦状を集め、そして17歳になったときに、準遊撃士から正遊撃士へと昇格した。

その間、お姉ちゃんもしくはお父さんの情報はまったく集まらなかった。

そして——私はなぜか、この街に来ている。
貿易都市クロスベルに。

「お初にお目にかかります。正遊撃士、フェン・マオ。本日より遊撃士協会・クロスベル支部に正式に所属させていただきます——！」

お姉ちゃんはどこだ！（前書き）

早くも暴走回です。

お姉ちゃんはどこだ！

遊撃士協会クロスベル支部へ挨拶を済ませた後、フェンは東通りで情報収集をしていた。もちろん、その情報収集とは顔のある意味見たことがない双子の姉についてだ。
通りかかる人に「私とよく似た人を見かけませんでしたか？」といったものように尋ねる。

「うーん、見てないねえ」

「遊撃士だー！ 人探し？ ぼくも手伝ってあげるー」

「紫紺の髪で美人さん、ねえ。あ、なんかの雑誌で見たかもしれないわ」

しかし帰ってくる答えはやはりめぼしいものではなかった。

雑誌って、そんなところで記事になっているくらいだったらフェンもこんなに苦労していない。

今日得られた1番の情報といえば……

「君と似た女性？ ああ、見たことあるよ。歓楽街でさ、たまに見かけるんだ。あ、でもでも君の絶壁な胸とは違ってポインだったよ」

絶壁は余計だ。

1番有力といえは有力だが、姉がポインと評されるほどの胸を持っているわけがない。

一卵性双生児なのだ。

遣伝子はほぼ一緒なのだから、姉がポインなはずがない。

もしそうだとしたら、あまりにも不公平すぎる。

「そもそも、クロスベルにいるのかなあ？」

母がたまにしてくれた話しによると父は各地を転々としていて、出会いは本当に偶然だったらしい。

その運命的な出会いから燃え上がる恋が始まり、両親に反対され駆け落ち。

そしてスピード結婚。

ちなみにできちゃった婚だとか。

どんだけだ。ふざけるな。

駆け落ちして子供まで産ませたくせに家を出ていくなんで、しかも双子を引き離すなんて。

いくらなんでも無責任すぎる。

話しが逸れた。

とにかく問題は姉がこのクロスベルに来ているかどうかだ。

カルバードからクロスベルに来たのは協会本部から要請を受けたのが理由の一つ。でもその最たる理由はカルバードで姉の情報がまったく見つからなかったことだ。

カルバードで掠りもしないのならば、もしかして外国にいるのではないか。

そう考えたからこそ、フェンはここに来た。

来たのだが……時はすでに夕方。

茜色に染まる空が今は目に痛い。

港湾区のベンチにもたれ掛かるとその紅さがよくわかる。

フェンは途方に暮れていた。

見つからなかったのだ。姉の情報も、今日泊まる宿も。

「……はあ、今日はギルドで休むしかないかあ」

新しい土地に来たら、その地の宿に泊まる。これが習慣化したのは、

もちろん姉の情報を求めてだ。

しかしここ最近ではギルドの部屋よりも宿の方が肌——というよりも身体にあってしまった。

ギルドで寝るよりも、宿で寝たほうが疲れがよく取れるのだ。

これによって宿に泊まることがますます定着し、ついには宿がないとダメダメな一種のダメ人間になってしまった。

「むむ、ということは野宿の方が疲れが取れるかも！」

これは名案だ。

フェンの耳はすでに獣並みと言われるまでの聴覚を誇る。つまり、どこかの屋上で寝ていれば勝手に情報が入ってくる。

「おおお！　すごい、私いつも以上に冴えてるかも！　よっし！」

俄然やる気。勢いをつけてベンチから離れ、手は素早くポーチへ。

それから足早に港湾区を南に抜け、東通りへつくと人気のない路地へと入り込む。

「このあたりでいっか。よい、しょっと！」

鉤爪のついた縄を取り出し、家の屋根に引っ掛ける。この手の作業は訓練所で嫌というほど練習した。それこそ、教官役であるベテラン遊撃士に止める！　と怒鳴られても無視して続けた。

おかげで今ではいかなる状況下でも、どんな場所でも引っ掛けることができる。

フェンは家の屋根に登ると、そのまま中央広場方面へと鉤爪を駆使して移動していく。

あるときはターザンのようにぶら下がりながら勢いに任せて移動し

たり、遠くにある建物に行く場合は引つ掛けた縄の上を歩いたりもする。

「ふう、とりあえずこのボロいビルの屋上でいいよね。あ、猫ちゃんお邪魔するよ」

「にゃ」

中央広場の外れにある、ちょっと浮いた古いビルの屋上が今日のフエンの寝床だ。

先住、猫であるらしい猫の頭をなでなでした後、出入口である扉の上へと登り寝袋をさっそく用意。

少し転がってみるが——うん、なかなか悪くない感触だ。

特に、この石の無機質な冷たさが心地好い。

「猫ちゃん、干し肉いるー？」

「にゃ」

夕飯の干し肉をポーチから取り出し、猫に見せるとそっぽ向かれる。やっぱり煮干しじゃないとダメなのかな？　と思いながらフエンは干し肉を口に含んだ。

「……………うま」

ブラックペッパーのピリリとした辛さがたまらない。

（ちっちゃい頃、おいしすぎて毎日食べてたらお母さんに叱られたなあ）

懐かしい思い出に浸りながら、屋上で寛ぐ猫を観察する。

おお、伸びた伸びた。

これで首が伸びたらろくろ首だ。

おっとそうだ。この猫ちゃんには頼みたいことがあった。

「あ、そうそう。明日朝4時に起こしてね、猫ちゃん」

「……………」

完全なる無視。フェンの言葉など聞く価値もない、とばかりに黒猫は背を向け、ついには毛繕いまで始める。

これは信頼されているのか、いや違う。舐められているだけだ。

（こうなれば、最終手段っ！）

一度で良い。猫に起こしてもらいたい。

その願いがフェンにある奥義を発動させた。

それは――

「お願いします、猫様。私を朝4時に起こしてください」

膝を折り、両手と頭を地面にこすりつける。つまりは土下座だった。

「じゃ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7785y/>

遊撃士の私と〇〇〇でアーティストなお姉ちゃん

2011年11月29日20時56分発行